

MACF 礼拝説教要旨

2022年8月14日

「あなたはわたしを何者だと・・・？」

ルカによる福音書9章

9:18 イエスがひとりでお祈りされたとき、弟子たちは共にいた。

そこでイエスは、「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。

9:19 弟子たちは答えた。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『だれか昔の預言者が生き返ったのだ』と言う人もいます。」

9:20 イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」

ペトロが答えた。「神からのメシアです。」

9:21 イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、

9:22 次のように言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」

1) あなたはわたしを何者だというのか？

ルカによる福音書の同じ章の前のところにこんな記事が出ていました。

9:7 ところで、領主ヘロデは、これらの出来事をすべて聞いて戸惑った。

というのは、イエスについて、「ヨハネが死者の中から生き返ったのだ」と

言う人もいれば、

9:8 「エリヤが現れたのだ」と言う人もいて、更に、「だれか昔の預言者が生き返ったのだ」と言う人もいたからである。

9:9 しかし、ヘロデは言った。「ヨハネなら、わたしが首をはねた。

いったい、何者だろう。耳に入ってくるこんなうわさの主は。」

そして、イエスに会ってみたいと思った。

イエスとは何者なのか、それはヘロデ王にとっては興味深い内容であり

自分が殺したバプテスマのヨハネが生き返ってきたのか、それとも

旧約聖書に出てくる偉大な預言者の再来なのか、気をもんでいました。

報復や神の裁きを恐れていたとも考えられます。

当時、イエス様の弟子たちはまだ政治的改革者としてイエスさまを見ていた可能性がありました。しかし、それはイエスの願いでもないし、見当違いでした。

ペトロはイエス様のことを「神からのメシアです。」と答えていますが、ここには

政治的改革者、勝利者、ローマ帝国からの解放者というイメージが強かったと思います。

そして他の弟子たちも同様の感想を持っていたと思います。

メシアとは「油注がれたもの」(神からの特別な使命を帯びた王であり、祭司であり、預言者)という意味の言葉です。「救い主」という意味に広がっていきました。

もともとは「キリスト」という言葉が使われています。

ペトロの返事は間違っていないでして、イエスさまは「メシア」だからです。

2) 苦しみを受けるキリスト

ところがペトロの答えを受けてイエスさまは不思議なことを語られました。

9:21 イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、

9:22 次のように言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排

斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」

*「誰にも話さないように」というのです。つまりペトロが考えていた「イエスはメシア、イエスは政治的改革者、ローマ帝国からの解放者」というイメージだけが先行するとイエスさまは問答無用で捕らえられ、政治犯として殺されることになるでしょう。

それに、ペトロが抱いていたメシアとしてのイエス像は、本当に偏ったものでしたのでメシアとしての全容をまったく理解できていなかったと言えるのです。

それが広がってしまうことはイエス様の働きの妨げになるものでした。

そこでイエス様は

「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」

と語りました。

ここにはイエス様の宗教指導者たちからの迫害と十字架の死と復活が語られています。

これを抜きにしてイエス様ご自身が考えておられる「メシア」としての働きは完結しませんでした。

聖書の教えるメシア、救い主の働きの中心は政治的勝利者ではなく、むしろ虐げられている人たちの友となり、今までの既存の価値判断とは違う大きな愛による人への祝福の提供する救い主。

そのことのために誤解され訴えられても徹底的に「愛を示し、神の赦しを示し、他者の罪をすべて担って、愛のために死ぬことさえ逃げ出さない勇気と希望を提供する救い主」そして、神に受け入れられた証として「復活し、永遠のいのち」の希望を提供する救い主。

イエス様をメシアとして信じるというのは「これらの要素」や出来事を見た上で「圧倒されて、ひれ伏す」ような出来事なのです。

それらの出来事を全部、通過したイエス様の姿を心に連想し、「まさに、そのイエス様が私には必要です」と促され、その御方を信頼し、礼拝することに通じます。

3) 圧倒的に利他的な生き方による苦難

イエス様の生涯を読んでいって不思議なのは、自分が特をし、自分だけを利する言動、自分を支配者にするように扇動するような教えがないということです。

むしろ、

「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」と語りました。

*多くの苦しみ：

これはご自分の貧しさもあるでしょうが、それ以上に人々の病気、貧しさ、不平等、圧迫、迫害などを見聞きし、心に痛みを感じ、その苦しみにあえぐ人たちへの、愛による痛みと考えることができるでしょう。あるいは目の前に起こっている悲劇について、すぐにそこに介入して状況や世界を変えることのできないジレンマもあったかもしれません。

イエス様ご自身は神の御子であるのに、人の子として生まれた事自体、多くの苦しみの始まりだったと思います。

しかし、イエス様は、それらの、また、私達の苦しみを、身に帯び、感じ、痛みを共有し、連帯しててください。

イエス様には、私の苦悩、あなたの苦難、痛み、哀しみ、寂しさ、辛さがわかるのです。

多くの苦しみを担って、通過してくださったからです。

*排斥され殺され：

これは宗教家たちの妬みからの攻撃でした。今までの律法主義的な掟主義的な狭い神理解、愛よりも「掟」を圧倒的に優先する宗教たち、指導者たちの教えに「ノー」と言ったことへの反発は絶大でした。

神の愛に気づき、神の愛に生きることを語り、神の愛による祝福と癒しをもたらしたイエス様に対して、指導者たちは自分たちのメンツが潰されることを意識していました。

当時の指導者たちの多くは、聖書を教えながら、その指針を「律法主義」に置き「神の恵みや神の憐れみ、愛」に目を留めることがすくなかったのです。でも、そこに教えの本質があるべきでした。ですから、人々の心がイエス様の教えに向かってしまい、いわば彼らの既得権益を失うほど指針の変更を余儀なくされる「神の愛による祝福」の教えが彼らには許しがたい冒涇と感じたのです。そこで彼らはイエス様が活動し始めると、すぐに「殺す」ことを論じ始めています。

彼らは人々を扇動し、イエス様を十字架に掛けることを決定するよう働きかけ、成功します。

しかもその判決はローマの総督ピラトによるもの、つまり異邦人によって殺されることになりました。宗教指導者たちの卑怯なやり方でもありました。ところがイエスさまは、それさえも抗うことなく「受け止める」のです。愛の実践、赦しの実践がそこにも明確にありました。イエスさまは、あなたを愛し、あなたが、わたしが逃れることのできない死に連帯し、あなたの死を、わたしの死を死んでくださいました。そして、愛で包み込み、赦しを宣言されました。

*復活する：

イエス様にとって「死」は終わりではありませんでした。むしろ、メシアのもたらす祝福、罪の赦し、愛の実践、死にゆくときまで敵対者への赦しを宣言する偉大な愛の具体的な道標でした。メシアの全人類に対する「愛の宣言」そのものでした。それを父なる神が受け止め、受け入れ「イエス様を復活させた」と聖書は教えます。

復活は、イエス様の生涯通して示された生き方や徹底した愛が、神に受け入れられ、神の願いどおりの生き方、であったことを確証するものです。神はイエスさまが死んだままであることを、喜ばず、むしろ、復活させることで、この方こそ「神のメシア」なのだと世界に宣言されたのです。

使徒信条はまさに、そのことを告白しています。

使徒信条の途中までですが・・・

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

我はその独り子、我らの主、

イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりてやどり、

処女(おとめ)マリヤより生れ、

ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、

十字架につけられ、死にて葬られ、陰府(よみ)にくんだり、

三日目に死人のうちよりよみがえり、

天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり、

さて、これらのことを、今私達は聖書から読むことができます。

ペトロの状況よりも遥かに情報量は抱負です。

そして、イエス様はあなたを愛し、あなたのために祈り

あなたに尋ねます。

「あなたは、私を誰だと言いますか？」

「あなたにとって私は誰ですか？」

あなたは、どんな答えをイエス様に返すでしょう。

「イエス様、あなたは私のメシア。私の全てを知り、すべての足りなさ

愚かさを知りながら、私を愛し、私のために苦しみを共有し、悩みを

担い、死んで、復活してくださった救い主です。あ

なたは、わたしのすべての面で

救い主です。私はあなたを礼拝します。」と真剣

に、心から告白できたら

良いですね。

MACF 礼拝映像はこちらです。

https://youtu.be/N4sZAgr_bVQ